

が、各人が、それぞれに不幸だった体験を秘めて快活に話し合い、現在の幸福を語り合う様相には、時の流れの効用を痛感した次第である。

それにしても各人の胸に秘められている体験には、鮮烈なものがあると思うし、二度と繰り返されてはならぬものである。どうか各人の思いをもって「平和の礎」を築きたいものである。

## 朝鮮の生活十年間

愛知県 祖父江 筆 男

全州師範学校へ

昭和十一年一月、満鉄（南満州鉄道株式会社）農林部門への入社を夢見て、満鉄大阪出張所で採用試験を受けた。私の父は当時愛知県食糧検査技官として農林業務に携わっていて、家業も小規模経営ではあるが兼業農家として生計を維持し、村での生活も楽な方であったようだ。私が農林学校を卒業したときは、父は四十

五歳であった。まだまだ若いもんには負けんぞと至極意気軒昂で、「人間は若いうちに苦勞しておくもんだ」と、私の海外雄飛に大いに賛同してくれた。昭和十一年度の採用条件には「長男は除く」との項目がなくなっていたので、学校からの受験推薦者六人の一人として採用試験に臨んだが、長男はやはり駄目であった。私とA君は無念の思いに唇をかみ、その不遇に涙した。そんな失意のとき、担任の先生に、朝鮮に新設予定の官立全州師範学校を紹介されたのである。渡りに船との思いで、同年二月上旬、勇躍渡鮮、京城で入試に臨み、二月末の合格発表では無事入学許可の通知を受けとることができた。

新設の全州師範学校は、急な建設計画のためか諸準備に手間取り、二カ月も遅れての開校となってしまう。入学式もその分遅くなり、確か六月五日であったと記憶している。

当時、朝鮮における学童の就学率は約三十パーセントと低く、これを一挙に五十パーセントまで引き上げようとの計画であったようだ。そのためにはまず教員

養成の急務が挙げられ、既設の京城・平城・大邱各師範学校のほかに、各道に一校ずつ官立師範学校を創設することが総督府の方針に示されていて、その先陣をきって着工されたのが全州師範学校ということである。

A君と私は夢を託し試験に臨んだのだが、残念ながら彼のもとには朗報は届かなかった。しかし、翌年彼は再び来朝し、今度は目標を京城師範学校に変えて受験した。そして見事合格を射止めたのである。私は彼のためざる努力の成果に心からの祝福を贈り、再会成就の喜びを分かち合った。

海外雄飛に夢をかけた六人全員が、満州・朝鮮と分散することにはなったが、くしくも念願どおりの夢がここに実現したのである。

二カ月の遅れを取り戻すため、夏休み、冬休みの期間が大幅に短縮され、毎日の日課も厳しく組まれ、学習、教育実習などなど、山積みした教育内容を精力的に履修した。短い夏休みのため帰省もできず、近くの門司にいた叔父の家でお世話になったことなど、その頃はまだ平穏で平和な世の中であったことが懐かしく

思い起こされる。

#### 初めての教員生活

昭和十二年三月三十一日付で、「任朝鮮公立普通学校訓導・南原公立普通学校勤務を命ず。」の辞令を手にして、いよいよ教員生活の第一歩を踏み出した。

南原邑にある南原普通学校は、郡庁所在地で教職員数二十一人、児童数約千人の学校で、内地人（日本人）の教職員は学校長以下十人、朝鮮人の教職員は十一人という郡第一の大規模校であった。当時陸上競技が盛んで、赴任後私も選手指導に専念し、二年目には全羅北道内で開催された十校での大会で各種目優勝を達成した。昭和十三年十一月三日のことであった。この年四月に学校名が変わり、南原電城公立尋常小学校となった。

#### 短期現役兵そして服役

師範学校卒業者で、義務教育に奉職している者は、恩典として現職のまままで四月一日入営、八月三十一日除隊で即日国民軍兵役に編入されるといふ。昭和十四年四月一日、歩兵第七十九連隊に入営したが、予想も

しない厳しい軍隊教育を受ける羽目になった。短期現役兵という、義務教育に奉職する者だけに与えられた恩典に感謝しつつ、厳しく激しい訓練に耐え、短くも辛い軍隊生活をどうにか乗り越えて満期除隊を迎えることができた。その際、陸軍歩兵伍長・国民軍將校勤務適任者の認定証を下付されて、やっとの思いで学校へ復帰することができたのである。

#### 転任そして結婚

戦友の松岡君も同じ学校に勤務し、一緒に入営、除隊した仲であったが、二人で勤務校に帰る途中、新聞を見て、私の転任を知った。昭和十四年八月三十一日付で、「錦山公立尋常高等小学校勤務を命ずる」という異動であった。赴任してからずっと家族同様の扱いを受け、親身に世話をしてくださった下宿屋のおばさんやお嬢さんに別れを惜しみ、竜城校の職員、児童に見送られて南原駅を後にしたのである。

赴任先の学校は主として内地人子弟の学ぶ学校で、錦山郡庁の所在地にあって、児童数は尋常科一年生から高等科二年生までで約百人、複式四学級の学校で朝

鮮人子弟も数人いたが、職員は学校長以下わずか四人という小規模校であった。校舎をはさんで右側に校長官舎、左側に教員官舎が二戸分並んでいた。赴任校の職員構成は、女子教員と男子教員と校長であった。男子教員は三十歳代半ばであったが、健康には恵まれていなかったようだ。校長は当時五十歳代の退職直前の方であった。学校行事の運動会や遠足は、学校側で企画して父兄に諮り、その父兄の協力で実施が可能という現状であった。

赴任後しばらくして校長の仲立ちで女子教員の渡辺逸枝と結ばれることになった。彼女は九州福岡の出身で、大正十年の生まれであった。父親が全州市で官職についていたため、その大半をこの地で育ったという。全州高等女学校を卒業し、小学校教員資格を取得して、現在の校の教職に任せられたものである。話はとんとん拍子に進んで、式は郷里で挙げることになり、昭和十六年一月九日門司の叔父・叔母同伴で、尾西市西中野の実家に帰り、無事挙式を済ませることができた。

## 運動会の事故

昭和十七年の運動会が開催されたときのことである。この日は晴天で誠に素晴らしい運動会日和であった。児童たちは団体競技に体操にと、決められたプログラムに従って順次種目が消化されていたとき、五年生の男児が突然鉄棒から落ちたのである。妙技を見せていた最中の出来事で、場内は一瞬鳴りを潜め、ことの成り行きを見守った。私はすかさず児童に駆け寄り、そつと容態を見て取った。頭から足の先まで慎重に触れ、異常の有無を確認した。骨折はないと見たが左足のひざの辺りが痛いという。私は運動会の進行を妻に任せ、その児童を自転車に乗せ、近くの医者に運び込んだ。幸いひざの捻挫ということではあったが、歩行はつらそうであった。

そこへ母親が真っ青になって飛び込んできた。子供の症状の軽いことを医師から聞いて安心したのか「祖父江先生ありがとう、先生ありがとう」と泣き出してしまった。その時、気が付いたのだが、その児童は地元でローカル新聞社を経営してる李さんの一人息子で

あった。私はその子を家まで送り届け、医師からの注意事項を父親にも伝えて学校に戻った。李君はその後しばらく松葉杖で登校していたが、それも半月ほどで治り、また腕白を繰り返し、叱られるほど元気になっていった。

## 弟の入宮と食糧事情の悪化

昭和十七年の十一月に、入宮前の弟の筆一が、私のところに一週間ほど滞在していった。郷里でのよもやま話は尽きることなく、あつという間の短い逢瀬であった。駅まで見送ったのが今生の別れになろうとは、だれが予測し得ただらうか。弟は松江の部隊に入宮し、まもなく満州に転属、そしてフィリピンへと更に転属した。

引き揚げてから知ったことだが、昭和二十年五月八日にネグロス島で戦死をしていたのである。終戦まであと三カ月というぎりぎりのところで戦死とは、誠に不運な弟であった。

昭和十九年の終わりごろになると食糧事情は一気に悪くなり、学校での昼食は代用食の弁当に変わって

た。長男昭彦は三歳になって目が離せず、長女和子も生まれて間もないまだ半年の乳飲み子であった。

このころから父は「もう帰ってこい。帰ってこれないか」と言いだした。たしかに父の周辺は寂しくなっ  
てしまったようだ。長男の私は朝鮮に、それから間もなく長女の妹も縁あって満州鞍山に嫁いでいった。そして弟の入宮である。あれほど強がりを言って、ともすればくじけそうになる私を鞭打ってくれた父も、年老いたのかずいぶん弱気になっていたようだ。父に同情はしたが、私はもはや帰れる立場ではなかったのである。

私が戦場に行かなくて済むのも、徴兵も短期現役という短い期間で済んだのも、この地で義務教育の教練を執っているからこそその恩典であったからだ。

#### 転任と入宮指導訓練所指導員

昭和二十年三月三十一日付で全羅北道全州完山公立国民学校訓導を命じられ、併せて教育実習指導教官にも任命され赴任した。しかし日本の戦況は悪化、沖繩は占領され、そしてドイツも連合軍に降伏した。ソ連

の大部隊は満州国境に集結しているという状況下である。そのころは授業はなく、近くの山に児童と入り、松根油の原料となる松の根を採取するのが日課となっていた。

次いで四月三十日に、全羅北道全州莊丁入宮準備訓練所指導員を命じられた。この訓練所は、この年、朝鮮人にも徴兵制度ができたので、少しでも安心して入隊できるようにするのが目的で開設されたもので、軍隊から将校一人、兵二、三人、それに短期現役出身者の下士官が訓練所の規模に応じて三、四人が指導員を命じられた。訓練所は全州完山国民学校の校舎の一部を兵舎として使用、二十五メートルプールが二つあったので、その一つを訓練所が使用することになった。

訓練所の組分けは、三段階に分けられた。小学校未修者を一組、同修了者を二組に、中学校以上大学を終えた者を三組として訓練にあたった。基本的な事項としてわれわれ教官に要求されたことは、訓練生が何も心配することなく入宮できるような雰囲気づくりが必  
要なので、絶対に暴力を振るわずに指導せよというこ

とであった。日課をきびしくせずに組んだので、訓練生にとっては楽であった。暑い日には、訓練が終わるとプールに飛び込むなど、彼らにとって結構楽しみであったようだ。

そんなころに思いもかけぬ重大放送があったのである。われわれ指導員は近くの住宅に行つてラジオ放送に耳を傾けた。終戦の詔勅であり、内容は十分には聞き取れずにいたが、戦争終結の「みことのり」であることだけは分かった。初めて聴く玉音だが天皇自らのお声とすぐ判断できた。

いよいよよくなるべき時がきたのだと感じとつた。だれも疑う者はいない。どう判断するかを決断のときである。

しばらくして主任教官は、まず指導員に諸状況の説明と訓練所の処遇について話され、すぐさま訓練生を含め全員を校庭に集めた。教官はごく簡単に「戦争は終わった、今日までご苦労でした。訓練所は本日限りで閉鎖することになった。即日帰宅するように」と伝えた。次いでわれわれ指導員も解散した。

### 恐怖の世情

学校は夏休みに入っていたが、十六日早朝全職員出校が伝達された。日本人職員は、国旗やその他重要書類の焼却作業を手際よく済ませ即時解散した。あつけない終戦宣言で、しばらく鳴りを潜めていた過激派分子の跳梁が始まった。

全州市近郊でも不穏分子が出没し、軍人や警察官のほか、教育者をはじめ銀行の頭取や支店長などが標的にされ、拷問を受けあるいは殺され、または監禁されて金を要求されたり、いずれかへ拉致されるといふ険悪な情勢となっていたのである。

そのころ、私の義弟が勤務していた錦山警察署の全職員の妻子は、闇船をチャーターして麗水港から引揚げのため出港したのだが、それっきり、遭難したのか、何が起つたのか分からないが、一人も日本へは上陸していないのである。これも何年かの後になって、私が死亡の証人になり、戸籍の抹消に立ち会つて初めて分かったことで、何とも悲しい、そして後味の悪い出来事であった。

九月に入って間もなく、全州から三キロほどの田舎に住んでいた、同じ学校に勤務していた友人夫妻が私のところに飛び込んできた。毎晩、万歳の声とともに付近は不穏な情勢となり、嫌がらせなどがあって、とても住んではいられない状況ということだった。彼は、最近日本人で小規模農業を営んでいた人から農地を買い受けたばかりで、将来農業経営で暮らしをたてていく計画だったそうだ。

#### 力強い味方

そんなある日、私が勤務していた訓練所の生徒が三人で訪ねてきてくれた。「先生、大丈夫ですか、あちこちで不穏な輩の脅しやゆすりがあり、日本人に被害者が出ております。私たちが先生を守りますから、何でも言うてください」といって、それから交代できてくれるようになった。また、米や卵までよく持つてきてくれた。私も、余分な服や靴を差し出すと喜んで受け取ってくれた。

間もなく全州市にも「引揚連絡事務所」が設置され、引揚げの準備が指示された。引揚げの順番は貧困者、

病弱者、老人、家庭状況などを勘案して順番が決められるのである。

十月のある日、錦山小学校の李君の両親がひょっこり訪ねてこられた。お米や果物を持ってお別れにきてくれたのだ。「子供が大変お世話になり、有り難うございました。お陰さまであの子ども元気でおります。先生もお達者で頑張ってください」。あの運動会の時の適切な処置が、夫妻の心情に強く印象付けられていたのだろう。李さん夫妻の喜びは、私に教育者としての面目を感じとらせ、この地で教鞭が執れたからこそその素晴らしい贈り物であったと今でも思っている。

#### 裸の引揚げ開始

十一月下旬になって、二十七日引揚げ出発の順番が知らされた。最後の荷造りをして出発を待つことにした。荷物は、私が担ぐリュックサックとトランク二個である。妻は長女和子（当時一歳三カ月）を背負うので、手におしめと少しばかりの携帯食糧しか持たない。そこで長男昭彦（三歳九カ月）に遠足用の小さいリュックサックを担がせることにした。その中に保存食用の

乾パンをいっぱい詰め込んだ。

残った家財道具や衣類の始末は、李さん大妻に任せることにしたので、出発当日は、李さん夫妻も見送りにきてくれた。財産も思い出も、何もかも打ち捨てての引揚げである。あきらめの心境は、かえってすっきりした気持ちで、木練も残らず家を捨てることができた。

全州駅から貨物列車で出発である。十一月下旬の全羅北道はもう冬支度、霜のおりる季節となっていた。朝夕の冷え込みは厳しく、毛布なしでの道中はとても耐えられないと判断し、毛布を持つことにした。幸い有蓋車に割り振られたのでほっとする。釜山港まで二日はかかると計算した。予想したとおり汽車は途中よく止まった。その間に小用を済ませるのだが、女性には難儀だったようだ。それに乳飲み子を抱える親は大変であった。水道を見つけてはおしめをすすぎ、貨車の中に紐を渡しておしめを干すので、貨車の中は満艦飾となった。二日がとても長く感じられたほど、苦労の連続であった。二十九日の朝やっと釜山港に着くこと

ができたのである。

われわれは、貨車から降りると港にある大きな倉庫に入れられた。倉庫の中は冷え冷えとしていて、コンクリートの上には薄っぺらなわらが敷いてあった。座るとじかに冷え込みが伝わってくるので、毛布の中にくるまって二日間を過ごした。三十一日の朝に、米兵がきて荷物の検査が始まった。それが済むと団員は順次船内にぎっしりと詰め込まれた。しかし私たち家族は、船内に入ることができなかつたので、甲板で家族がかたまって毛布にくるまり、寒さをしのぐことにした。引揚船は夕方釜山港を離れ日本に向かった。幸い海は凪いでいて静かであった。明け方、絵に書いたような美しい博多港に入港し、全員無事に上陸を完了することができたのである。博多では引揚げに必要な手続きがあり、それを済ませると引揚専用列車に乗り込んだ。やはり貨物列車であり有蓋車と無蓋車の混成車両であった。今度は子連れであったので、有蓋車に乗せてもらえた。

三日早朝、尾張一宮駅に到着した。尾西線に乗り換

え萩原駅で下車したら、父が迎えに来てくれていた。孫を抱き上げそれは大変な喜びようであった。母も妹四人も皆元気で暮らしていた。ただ満州の妹は未だ帰っていないかったし、戦地におもむいている弟の消息も皆目分らないという現状であった。引き揚げて数日後、私は弟の消息を知るために、千葉市にあった連絡事務所まで出掛けた。ここでは、弟の戦死が確認されていたのである。帰宅して父にその旨を伝えると、父と母は黙って仏壇に向かい、しばらく合掌していたが、その寂しげな後ろ姿を今でも忘れることができない。

#### 引揚げ後の再出発

満州へ嫁いだ妹一家四人は、昭和二十一年八月半ば、壺島島から引き揚げてきた。終戦直前に妹婿は現地召集で不在となったが、運よく応召部隊が居住地の近くにあり、終戦と同時に現地において召集解除となったため、妻子との合流は意外と早かったそうである。

しかし帰るまでの苦労は並大抵でなく、我が家へたどり着いたときは、妹も子供もひどい栄養失調であった。妹婿は、その後商業に精励し、いろいろと苦勞を

したようだが、最終的には東京に出て成功、現在では日黒で十四階の貸しビル業を営み余生を送っている。

終戦当時、父はそれまで二十年も食糧検査地方技官の職にあり、五ヘクター以上の田畑を経営する兼業農家でもあったから、幸い食生活には困ることはなかった。

私は、引揚げと同時に教職復帰ができて、母校の小学校に赴任した。恩師もまだ三人お元気で在職しておられたから、こちらの教育に関してもいろいろと指導を受けることができ、はやくなじんていくことができたのである。

戦後の学校では、どこの運動場もすべて全体が畑になっており、農産物の生産がまだ続けられていた。当時の月給では通動用自転車のタイヤ一本が購入できないというように、生産は需要に追いつかず希少物品は高騰し、いわゆるインフレとなり、また一方では、産業織物は好景気時代を迎えつつあったのである。

その魅力にひかれてか、同僚の何人かはさっさと見切りをつけて転業していった。私の家は一宮・尾西と

いう一大繊維都市の中に屋敷があり、織機を備える土地も十分あったので、織物業を始めるには最適な好条件であった。当世人にも勧められたりして、一時は真剣に転職も考えたのだが、最終的には教育こそが自分の天職であり、また、私に与えられた責務であると心に銘じ、やめたのである。それ以後はただ一筋、職務に専念してきたと信じている。

振り返れば教頭職十四年、校長職七年、教職にあること通算四十二年の足跡を刻むことができ、いささかなりともその責務を全うし得たのではないかと思っている。

いまこうして傘寿を迎え、静かに歩みきた道をたどりながら、私の人生航路はいろいろと紆余曲折はあったが、なすべきことはなし得たとの思いでいられる感謝の毎日である。

## 引揚げ少年の記

大阪府 玉木正豊

なるべくなら朝鮮時代のことは忘れよう、引揚げの苦労話も避けよう、というのが私のこれまでの気持ちでした。とかく折あるごとに自分たちの「昔の栄華」を語りたがる今はじき両親に対して、戦後の流行歌ではありませんが、「今さら、何を言ってるのさ」と、反発していた少年時代の気持ちの尾を引いているのでしょう。過去よりは未来を話したかったです。

ただ、戦後すでに五十二年、当時の小学生も、今は仕事の第一線からリタイアする年代になりました。記録を残すことの意味も少しは分かる年齢です。そんな心境の変化に自分でもやや驚きながら、引揚げ少年の記憶を、こうして綴ってみました。

記憶していることだけを、自分の気持ちに忠実に書いたつもりですが、しよせん、子供の記憶は、子供の